

極道の妻たち 情炎

2005(平成17)年4月2日鑑賞(ホクテンザ1)

☆☆☆



監督=橋本一/原作=家田荘子/出演=高島礼子/杉本彩/山田純大/保坂尚輝/未向/松重豊/前田愛(東映ビデオ配給/2005年日本映画/118分)

……極妻シリーズ第15作目の「看板」は、5作連続主演となる高島礼子だが、これをあのSM女優(?)の杉本彩が応援。前作から3年半以上も空いたのは、世の中全体が平穏無事になったせいだろうが、やっぱり『極妻』はオモシロイ! とりわけ今回はかなり新鮮! 一見の価値ありと私はみたが……。

3年半ぶりの第15作

最初の『極妻』は1986年11月公開だから、約20年近く前のこと。途中、十朱幸代、三田佳子をはさんだものの、『極妻』といえど何といても岩下志麻だったが、1999年3月の『極道の妻たち 赤い殺意』以降、高島礼子が主役を張ることになった。そして、これが結構「はまり役」となり、以降4本連続で製作された。

15作目の本作『極道の妻たち 情炎』は、2001年6月公開された第14作目の『極道の妻たち 地獄の道づれ』から3年半以上の空白期間(?)をおいたもの。その間、東映は『バトル・ロワイヤル』(00年)などをつくってきたが、やはり東映には『極妻』シリーズがよく似合う……。いかに世の中が変わろうとも、ヤクザ(社会)は存在しているし、裏社会の抗争もなくなるもの。そして、その男たちの抗争の裏には必ず女たちも……。もっとも、この『極妻』シリーズの主人公のような姐さんはめったにいないから、みんなこれに憧れるのだが……。

異色の「ひきたて役」杉本彩

極妻シリーズには姐さんの「ひきたて役」が必ず存在しており、それが最も似合っていたのがかたせ梨乃。ちょっと太めの感じもあった(?)が、そのカッコ

良さは姐さんにも負けず劣らず。だからこそ、このナンバー2が犠牲になったところで姐さんが立ち上がるのがひき立つというもの。この『情炎』では、そのひきたて役はあのSM女優(?)の杉本彩。杉本彩の『花と蛇』(04年)を劇場で観ることができたのは大感激(?)だったが、続いて05年5月には『花と蛇2』が公開される。杉本彩にとってはその合い間でのサポートの出演(?)だが、白い裸身を思いきりさらした『花と蛇』とは正反対に、この『情炎』では基本的に黒づくめの男の服装で通している。しかしそれはそれでカッコいいもの。杉本彩のデビュー小説である『指』の出来は?だが、突然「負け組」から「勝ち組」に転向した杉田かおるとともにバラエティ番組で異彩を放つだけでなく、こんな適役を得れば、スクリーンでも大活躍できそう。『花と蛇』もシリーズ化してほしいし、旬の間は杉本彩主役の新企画も考えてもらいたいものだ。

ヤクザ映画の主人公あれこれ

この極妻シリーズが始まったのは、ノンフィクション作家家田荘子が体あたり取材をして1986年に発表したルポルタージュ『極道の妻たち』(文藝春秋刊)に東映が目をつけたことによるもの。東映のヤクザ路線は、鶴田浩二、高倉健の任侠路線や菅原文太、松方弘樹らの抗争路線をはじめとして当然男が主人公。日活の高橋英樹主演の『男の紋章』シリーズもそうだった。唯一の例外は『緋牡丹博徒』シリーズだったが、ヤクザ映画ではやはり女は添えモノの役割になるのが通例だった。ところがこの『極妻』は、夫が死亡した後、その跡目を継いだ妻に焦点をあてたもの。男社会の中にただ1人異色の女親分が登場し、それまでの男社会の常識を女手1つで打ち破っていくところがミソ。

今最高に面白い、女信長!

そこで思い出すのが、現在毎日新聞夕刊の連載小説『女信長』。これは何と「織田信長は実は女であった」という発想で組み立てたもので、実に面白い。斎藤道三の娘であるお濃と「結婚」しているなど、歴史上のストーリーはそのまま、ただ違うのは、信長は実は女だということ。そこから生まれてくるさまざまな発想の転換は実にあざやか。もっともこれは、既に「劉備玄德は女であった」

というスーパー歌舞伎『三国志』パートⅡで採用された発想ではあるが……。

戦後60年の今の日本社会では、若い年代は圧倒的に女のパワーが強い。そんな平和な国では、「信長は女であった」という発想が生まれても当然か……？

権力バトルに登場する男たち

余命幾ばくもない本家の老組長の跡目を継ぐのは誰か？ その本命は若手ナンバー1の河本一兆（保坂尚輝）。かつて妻の白英玉（杉本彩）とともに韓国で暴れていたが、身代わりとなって服役した白英玉を置いて自らは日本に乗り込み、今や老組長の一人娘蘭子（未向）と結婚している身。しかし、本来誰からも本家の後継者と目されていたのは、非業の死をとげた波美子（高島礼子）の夫である西郷組の組長。その死亡に疑いの目を向ける波美子を尻目に、幹部たちは河本を後継者に決めようとしたが、老組長は死亡直前に後継者を西郷組の亡組長の弟西郷恭平（山田純大）に指名した。さあ大変……。これを受けるべきか否か。思い悩んだ波美子や恭平が出した結論は……？

2人の女に悩む河本

河本には妻蘭子との間に小さい子供が2人いた。河本は仕事上では怖いヤクザの大幹部でありながら、家庭内ではやさしいパパ。そして、必ずしも政略結婚ではなかったようで、わがまま娘の蘭子を心から愛している様子。そこへ突如登場したのが、5年間の服役を終えて河本を探すために日本にやってきた白英玉。

予想できるセリフは、「あんたを信じて身代わりで服役したのに、それを裏切ったあんたを許せない！」というものだが、この英玉はそうではなかった。そのセリフや生きざまは実にカッコいいもの。さてそれは……？ そして河本は、2人の女のうちどちらを選ぶのだろうか？

2股かけは蘭子……

他方、大阪の巨大組織の若者頭が長嶺昇三（松重豊）。こいつは私に言わせると、ニッポン放送をめぐるライブドア VS フジテレビのバトルに2005年3月末に突如登場した、SBI（ソフトバンク・インベストメント）の北尾吉孝社長のよう

な感じ……？ かなりのキレ者だが策略家風で、ちょっとイヤな感じのヤツ……？ 蘭子のクラブ経営の夢を応援し、河本の2代目就任を後押ししたのがこの長嶺だが、そこにはさまざまな思惑が……。その結果、蘭子はこの長嶺から半分暴力的に……。しかし女心は微妙なもの……。そんな長嶺と妻子思いのやさしい夫(?)河本を両てんびんにかけた蘭子は……？

1 輪の可憐な花は……？

この映画の登場人物はヤクザばかりだが、そこに1人だけ可憐な少女が登場する。それが西郷恭平を慕い続ける可憐なさと子(前田愛)。恭平が兄嫁である波美子をずっと想い続けていることを知りながら、じっと恭平に尽くしてきた彼女は遂に恭平との結婚式の日を迎えたが……。ヤクザの世界には危険がつきもの。本家の2代目に就こうとした恭平がヒットマンに襲われた時、彼女は……？

ハイライトは女2人の殴り込み！

ヤクザ映画のストーリーのハイライトは、我慢に我慢を重ねた挙げ句の「殴り込み」と相場が決まっている……。この極妻シリーズ第15作は、「情炎」というサブタイトルからわかるように、波美子と英玉という2人の女の情炎をテーマとしたもの。幸せの絶頂にいた恭平たちが襲われたことによって、堪忍袋の緒が切れた波美子は、恭平が老組長から形見としてもらった日本刀を片手に遂に巨大組織の本丸へ。これを応援する英玉はいつもの黒づくめの服装だが、その手にはナイフを装着したピストルが……。この、いわば銃剣のピストル版は結構使い勝手がいいようで、英玉も屋敷の中で大暴れ。しかし最後は……？

このハイライトとなる女2人の殴り込みは結構迫力があって面白く、一見の価値あり！ ちなみにパンフレットの表現を引用すれば、「壮絶にして美的、残酷にして華麗、リアルにしてファンタジック。これまでの斬って斬られて、撃って撃たれて——というパターンを破った〈肉体と白刃と拳銃と鮮血〉の凄絶な舞踏に昇華している」とのこと。私はこんなに形容詞を並べたてる文章はあまり好きではないが、言いたいことは十分に伝わってくる。ホントに極妻第15作目は秀作だよ……。

2005(平成17)年4月5日記